十三歳の時、心に思はく、今は早十三に成りぬ。既に年老いたり。死なん事近づきぬらん。老少不定の習ひに、今まで生きたるこそ不思議なれ。古人も、学道は火を鑽るが如くなれとこそ云ふに、悠々として過ぐべきに非ずと、自ら鞭を打ちて、昼夜不退に道行を励ます。或る時は後の山の、木の空に木の葉深く積れる上に常に行きて座し、或る時は見解おこる様、かゝる五蘊の身の有ればこそ、若干の煩ひ苦しみも有れ。帰寂したらんには如かずと思ひて、何なる狗狼・野干にも食はれんと思ひ、三昧原へ行きて臥したるに、夜深けて犬共多く来りて、傍なる死人なんどを食ふ音してからめけども、我をば能々嗅ぎて見て、食ひもせずして、犬共帰りぬ。恐ろしさは限り無し。此の様を見るに、さては何に身を捨てんと思ふとも、定業ならずは死すまじき事にて有りけりと知りて、其の後は思ひ止まりぬ。「おとなしく成りて後、此の事を思ふに、其の時の見解にて死にたらましかば、浅猿き事にて有りなまし。墓無かりける事哉」とて、自ら咲ひ給ひけり。